

Title	後期李朝の朱子學
Author(s)	石井, 壽夫
Citation	東洋史研究 (1942), 7(1): 20-30
Issue Date	1942-05-20
URL	http://dx.doi.org/10.14989/138818
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

後期李朝の朱子學

石 井 壽 夫

一 國の文化はその生命主體たる國體をはなれて抽象的には存在し得ない。したがつて、國民がわりきつた安住點をみいだし得ない國柄にあつては、文化がいかに慘な貌様を露呈するかといふことを解き明してみたいと思ふのが、本稿一篇の趣意である。

二

後期李朝とは、李氏朝鮮五百年のうち、宣祖朝以降日韓併合まで後期三百年をさして言ふのである。わが國で言へば、大約徳川時代三百年がこれにあたる。

ところが、面白いことに、偶然の一致とでも言はうか、この時代、朝鮮においても、わが國においても、いづれも朱子學が全盛をきはめ、國家社會秩序維持の規範となつてゐる。けれども、朝鮮では朱子學が國家

思潮の根幹となつたのは李朝建國以來のことであるから、わが國で言へば室町時代以來のことで、わが國よりは約二百年古いわけである。もつとも、前期李朝二百年間は朱子學とは言へ、未だ「詞華學」の範圍をぬけず、それが哲學的理解、いはゆる「理學」の領域にまですゝんだのは後期李朝に入つてからで、今問題にせんとするのは、この「理學」時代の朱子學である。

日鮮兩國の朱子學を比較すると、今のべた如く、その國家社會維持の規範となつた期間において朝鮮の方が遙に長いが、同時に恰もそれに比例するかのやうに朱子學の國民生活の全面にわたる浸透度が格段に徹底してゐる。わが徳川時代では朱子學が國家思潮の根幹となつたとはいへ、畢竟儒學界中の「學派」として存在したにすぎなかつたが、李朝では朱子學はまづ儒學を

統一し、ついで佛教を斥け道教を倒し、いやくも朱子學にあはぬ學說思想はすつかり禁壓し、完全に國教的地位を獲得し、國民の全生活様式にわたつて生活規範となつたと言つてよい。

しかし、その間の相違はたゞにそのみに止らず、もつと仔細に比較すると、ことに後期李朝の「理學」と徳川時代の朱子學とでは、とんでもない差異がみとめられる。と言ふのは、朱子學が後期李朝にあつては激甚をきはめた政治鬭争、いはゆる朋黨の争とむすびつき、李朝衰亡の主因をなしてゐるにひきかへ、わが國では尊皇論勃興の一大源流となり、明治維新をつらぬいて、現代日本の赫々たる隆興の一大動因となつてゐるのである。

この事實は深く思ひめぐらしてみると、大變興味あることである。隣りあはせた二つの國で、同じ時代に榮えた同じはずの朱子學が、一つの半島王國では國家衰亡の因となり、一つの島帝國では國家興隆の因となつたといふのは、まさに天地雲泥の差と言ふほかはない。私はこの鮮かすぎる對照を一つの手掛りとして、問題の究明を試みたいと思ふ。

三

以上の目的にそふために、一應簡單に後期李朝朱子學の性格を説明すると――

後期李朝朱子學の特性は、一言でいへば「形式的」な、餘りにも「形式的」な點である。「形式的」「抽象的」「觀念的」といつた一聯の性格こそ、後期李朝朱子學のどぎつい特徴である。

一體後期李朝三百年は有名な黨争時代で、黨争にあげ黨争にくれたといふのが偽りのない實情である。朱子學はこの黨争と堅くむすびついてゐたが、なかつく朱子學における禮論と理氣論とが、李朝學人のもつとも好んで論争の的とし、黨争の好具としたところである。

禮論は、生活の形式的規範としての儀禮についての議論で、朱子學の重んずる名分もこの儀禮を通してのみあらはされ得るのであるから、決して輕視すべきものではない。この禮論が、李朝では後期に入つて金長生（沙）や鄭述（寒）といつた禮論の大家が出るに及んで、蔚然として盛んとなつて來た。禮論が重視される結果、各黨派としても禮論の大家をもつことは自黨發展の原

因であるから、非常にこれを尊重し、きそつてその研究に従事し、禮論は異常に發達した。そして各黨派は自説を主張して、禮論に勝利することによつて自黨の勢力を確立せんとあせり、けはしい論戰が展開した。

事の起りは、孝宗の薨逝に際し、母后王大妃の服喪はどの程度に行ふべきかについて疑義が生じたのである。と言ふのは、孝宗は兄の昭顯世子が早逝したため仁祖の嫡長ではなく次嫡の身にして王位をついだからである。西人派の巨頭宋時烈（尤庵）は「子は母を臣とするの義なし」と言つて、孝宗は次嫡すなはち庶子であるから一年「朞服」でよいとしたに反して、南人派の尹鰲（白湖）・許穆（眉叟）らは、君臣關係を重んずる立場から、嫡長であらうが次嫡であらうが、一たん即位したかぎり王は王であるの立前に則つて、三年の喪「齊衰」に服すべきを主張した。そこで兩論あひ持してゆづらず、禮論は全く黨爭化して轉激につぐ轉激をみた。その結果、有能卓識な政治家學者で、この論爭の犠牲となつて倒れたものも少なくなく、宋時烈もその代表的な一人であつた。

一方理氣論は、朱子哲學の根本問題である、宇宙人

生の本體を「理」とみるか「氣」とみるか、といふ哲學理論上の論爭にして、李滉（退溪）對奇大升（高峰）・李珥（栗谷）の四端「惻隱・羞惡・辭讓・是非」七情「喜怒哀懼愛惡欲」理發氣發の論戰に端を發する。結局、前者退溪の流は「理」を重んじ、理先氣後説を奉ずる主理派として南人派の黨論となり、後者栗谷の流は「氣」を重視する理氣一元論の主氣派として西人老論派の奉ずるところとなり、互にしのぎをけづつて相爭ひ、これまた異常な發展をみた。

* 高橋亨博士「李朝儒學史に於ける主理派主氣派の發達。」
（朝鮮支那文化の研究）参照。

このやうに、火の燃ゆるやうに灼熱した黨爭にむすびついて、生死を賭した論爭がむしかへされくりかへされたから、禮論にしても理氣論にしても、學問の理論體系としては異常な發展をしめし、宗主國の支那學者でさへ未踏の境地をきりひらいたと思はれるむきさへあつた。また名分の思想が極度に昂揚した事實は否定しがたく、一應國民の文化や精神が高いはりをおびて來たとみとめられる。たとへば、李朝の政治糜爛の極に達し、「臣強」の弊君威を凌ぐかにみえながら、し

かも臣下にして君に代らんとする名分の大罪人ついに
出でず、かへつてある意味では君權増大したとき、
名分思想昂揚の致せるところである。そこで私はこれ
まで舊來の一面的な李朝衰頹論を否定し、李朝は後期
に入つて今一度回春したのであると、李朝回春説をと
なへてきたのである。^{**}

^{**} 拙稿「後期李朝黨爭史についての一考察」(社會經濟
史學 十卷六・七號)

しかし、今一步ひるがへつて、よく／＼考へてみる
と、禮論にしろ理氣論にしろ、いづれも形式的な抽象
論にして、かゝる抽象的觀念的な世界に、全政治家・
全學者が自己の全生命全智能をかたむけつくし、現實
具體的に國家を豊かにする道、時務策としての富國強
兵の道がすつかりなほざりにされるといふことは、は
たしてどういふものであらうか——。いたづらに理論
體系のみが形式的に發達し、實生活に役だつことを忘
れた學問の發展や、形式的な名分思想の瀰蔓が、はた
して國家の健全なる成長をたすけ得るものであらうか
——。疑なしではおられない。

たしかに大義名分は朱子學の精髓であるが、その大

義名分論も、恰も國運を賭したがごとく必死に論爭す
ることが、李朝の禮論のやうに、結局些細な言はでも
がな末消的な形式論に墮してしまつては、國家社會
にとつてなんら貢獻するところがないばかりか、かへ
つて弊害をはびこらせるもので、たはいないざれごと
と言ふほかはない。すなはち後期李朝の朱子學はすで
にその骨髓を喪へるもので、李朝の學人はこの形骸化
した朱子學をさん／＼にいじくりまはして、徹底的な
解剖をこゝろみたけれども、ついにそれが生命を喪へ
るものであるを悟らなかつたと言ひ得るであらう。か
ゝる骨髓を斷滅せる朱子學が國家社會維持の規範とな
るとき、なんで國家の健全なる發展がのぞめようか。
こゝにおいて、私は後期李朝回春説を發展させ、後
期李朝は「理學」至上の時代となることによつて、一
應形式的には回春したけれども、實はその回春の仕方
そのものがいびつであつたとなさざるを得ない。この
歪曲し萎縮し脆弱化した李朝の回春こそ、李朝が五百
年の長きにわたつて、珍らしくも國家をもちつゞけ得
た原因であるとともに、その末期におよんで、慘澹た
る醜狀を世界にさらけだしつゝ、ついに衰亡の末路を

たどつた所以であらう。

四

後期李朝の朱子學は極度に形式化し抽象化し、その骨髓を喪失して、國家衰亡の因となつたのであるが、しからば一體なぜにかくのごとく形式化したのであらうか――。

私は、この問題を朝鮮民族の形式性といつた風な民族性によつて片づけさるのは、餘りにも安易な妥協ではないかと考へる。むしろ、さうした民族性こそいかにして生みだされ造りだされたかと、反省さるべきであらう。私はこの問題を解決するためには、李朝建國の由來にまでさかのぼる必要があるかと考へる。

李朝は前朝高麗にとつてかはつて、太祖李成桂によつて建國された。李成桂は言ふまでもなく高麗の臣民であるから、高麗に代つて新しく國を建てるならば篡奪の汚名はまぬがれない。そこで、なんとかうまい名分をつけることが絶対に必要である。この苦しい立場をぎりぬけるために、とどのつまり、李朝は建國の大義を支那一統の天子とみなされた「明」主から封冊をうけることによつてかちえようとした。これを思想的

にうらづけたのが、麗末佛教の衰頽に乗じて勃興の機運にあつた朱子學である。

朝鮮に朱子學の傳來したのは、麗人が「元」の大都に出入したところよりはじまり、蒙古族の大「元」帝國をへてゐあつた。ところが、尊王攘夷を標榜する朱子學の主張によれば、「元」は夷狄野蠻の國であり、中華を篡うた正統ならざる國となる。されば、この夷狄蒙古族を漠北に驅逐して漢民族の國家を復興した「明」は、支那中華の正統を恢復したものとされ、天下を一統する眞の天子であるとされた。したがつて、朱子學の教から言ふと「元」にそむいて「明」に臣事することが正しいことであり、「明」にそむいて「元」に歎を通じた高麗は否定され、「明」の冊封をうけた李朝こそ是認せられねばならぬと、理論づけができた。

かうした事情から、李朝は建國の原理を、朱子學の教にもとづいて、支那正統の天子であるとされた「明」主の封冊をうけた事實にかりてきた。もとより、それは「かりもの」にすぎなかつたが、少くとも理論上は「明」あつての李朝であつたわけである。

されば宗主國たる「明」が安泰たるかぎり、李朝も

國家存立の地盤に動搖がないわけであるが、その「明」が、支那中華主義からみると、蒙古民族となんら異ならない夷狄野蠻の國、滿洲族の「清」によつてとつてかはられるといふ重大事件が生じた。もつともこの「明」「清」鼎革に際しては、直接「明」室を滅したのは流賊李自成で、「清」朝は「明」に代つて李自成一討つといふ好口實をかちえ、「清」も入關後は自己は「明」の統をうけつぐものとの立前をとつたのではあるが、「明」「清」抗争の歴史から言つて、「明」を滅したものが「清」であることは否定できない事實である。李朝にとつて宗主國「明」の斷滅は、建國の立前から言つて國家原理の斷滅である。この場合、李朝が眞實建國の立前に殉じ、朱子學の教に生きんとするならば、道はたゞ一つ。あくまで大義に則り、夷狄野蠻とさげすむ「清」朝討滅に躍起して、「明」室復興に死闘することである。もし、力いたらず双おれ矢つきたならば、全國家をあげて「明」國に殉じ、いさぎよく斷滅すべきである。かくてこそ初めて、尊王攘夷、不事二君を標榜する朱子學の骨髓に活きるものと言へよう。

しかるに李朝はこの道をえらばなかつた。「明」滅亡

以前にあつて、「明」「清」覇權の歸趨定かでなかつた時には、一度ならず「清」に反抗してもみたが、丁卯(仁祖五年、皇紀二二八七年) 丙子(仁祖十四・五年、皇紀二二九六・七年)と二度までも鐵騎破竹の勢にふみにじられ、哀れ城下の盟を結ばざるを得ざるに至つては、あまりにも現實的な實力の懸隔が、自己の力の限界をはるかにこえた、どうしようもない大きな重壓として、李朝人士の全精神をどつしりと抑へつけてしまつた。ましてや、「明」が完全に滅んで、その救援がのぞめなくなり、「清」朝の政治的重壓が層一層いやましてくるや、李朝としては、あがいても、もがいても、どうにもならんぞといふ、塞々とした諦感が骨の髓までしみとほつた。

中には孝宗や宋時烈のごとく、雪恥復讐を標榜し、國民精神の振興と兵備の充實とをはかつた國王・政治家もあつたが、それらにおいてすらも、眞實大「清」を擊破するにたるだけに積極的に自國の力を充實し、鬱陶しく李朝に蔽ひかぶさるこの重殻をぶちやぶらうとする烈々たる意欲において完全ではなかつた。この重壓をうちやぶつて、建國の原理を完徹し、朱子學の教を實にしないかぎり、いかに義理を唱へ名分を説い

ても、徒らに内攻して、内部鬭争を激發するばかりで——いはゆる朋黨の争がこれである——國家の明朝淵達な發展はのぞめないにもかゝらず、李朝人士の求道の誠にかくるところあり、ついにこの最大問題の解決に國運を賭してぶちあたる決意を振ひ起さなかつた。これはある意味から言ふと當然であつたかも知れない。といふのは、建國の原理、朱子學の教とはいへ、尊王攘夷を標榜して「明」の封冊をうけたのも、なにも自らにしかあらねばならぬといふ絶對的要請から出たものではなく、建國の名分をかちえんがための方便にすぎなかつたのである。この相對的な方便にすぎない「明」室に殉じて、國家の斷滅を覺悟してまで「清」朝と戦ふほど、李朝が馬鹿正直者にはなりきれなかつたのは、李朝のなりたちから考へて當然であつたとも言へよう。

そこで彼らは、教にそむいたことゝ自責の念に惱みつゝ、心ならずも「清」朝服屬をつゞけた。こゝにおいて、すでに國家の政治と教とは、根本においてはなればなれになつてしまつた。たゞに朱子學の教が國家といふ具體的實在をはなれて抽象的存在になりさがつ

たばかりではない。さらに一步すすんで、政と教とは背馳矛盾し、互に相殺作用をなしはじめざるを得なかつた。

もし朱子學が自己の正しい成長をとげようとして、その精髓とする大義名分をはつきりさせ、まこと李朝人士の魂の規範となり、實踐の基準となるならば、朱子學の教にそむいて「清」朝に屈服し、その正朔を奉じてゐる李朝は、許しがたい教の罪人として否定されねばならない。現に光海君のごとき「明」にそむいて欺を「清」に通じたことを重大な口實とされて、廢主の憂き目にあつてゐるではないか。

私はこゝに至つて、くしくも李朝建國の原理が、めぐりめぐつて李朝否定の原理となりはてた事實の妙におどろかざるを得ない。「元」帝國から傳へられた朱子學によつて「元」朝を否定し、「明」の封冊をうけることによつて巧に建國の名分をかちえた李朝は、その名分故に自己自身を否定しさらねばならぬ矛盾につきおとされた。それかと言つて、前期「詞華學」時代の國家社會の行詰りを打開する革新原理として、曲りなりにも後期李朝一應の回春をもたらした朱子「理學」の

立前として、きれいさつぱり李氏王朝を否定しきるわけにもゆかない。この矛盾が李朝國家の一員として現に生存しつゝあり、朱子「理學」至上の地盤によつて現在の政治的社會的優越を確保しつゝある李朝學人たちから、安住すべきわりきつた世界を奪ひ、彼らを底深い不安と焦躁とにかりたてた。そこでこれら朱子「理學」を奉ずる人々は、この不安の根源である朱子學を、知らず識らずのうちに觀念の世界に追ひこみ、禮論や理氣論のやうな抽象的形式的なものに骨抜きにすることによつて、辛うじて自己欺瞞をはたしたのである。

後期李朝の朱子學が、理論體系の精緻さや、侃々諤々の爭論から、いかに表面上は華々しくみえようと魂のぬけた、力のない、ふざけきつたものとならざるを得なかつた悲劇は、かくしてもたらされた。しかもこの悲劇の上にたつてのみ、李朝は辛うじて國家的存立を保ち得たのであるから、國家全體が萎縮し歪曲し深刻な悲劇的貌様を露呈しつゝ、一路衰亡のみちをたどつたのである。

五

後期李朝の朱子學にくらべて、わが徳川時代の朱子學は全く對照的である。

言ふまでもなく、徳川時代朱子學が全盛をきはめたのは、徳川家康が朱子學を御用學として採用したにはじまるが、彼が朱子學を採用したのは、その名分論が封建的な秩序維持にもつとも格好なところを買つたからである。たとへば、その根幹とする忠孝論のごとき武家主従關係ないし士民關係の確立には、もつてこの教であつた。その意味で林家を筆頭とする多くの朱子學者は、封建制維持といふ御用學としての使命を充分にはたしたわけである。

しかし、朱子學が單にこの領域に自己をとちこめてゐたならば、それは封建制の崩壊ととも運命をとみにし、あへて現代日本興隆の一動因となることはできなかつたであらう。わが徳川時代の朱子學が一面において封建制維持の規範として三百年の泰平をもたらし、ともに、さらにすゝんで封建制を自己革新し現代日本建設の一動因たり得たのは、畢竟それが尊皇論に發展することによつて永遠の具體性を獲得したからである。

その代表的學派の一つとし水戸學派をあげることができる。徳川光圀公に濫觴する水戸學は、朱子學の標榜する尊王攘夷の教をとつて、もつてわが國肇國以來嚴としてゆるぎなき皇國の大道を明らかにした。すなはち、忠の最高なるもの、義の最大なるものとして至尊への忠、至尊への大義が、朱子學の骨髓とする大義名分論によつて赫然たらしめられたのである。至尊への大義は、「天壤とゞもに窮りなく」かつて過去に斷滅したことなく、未來永劫變ることなく、永遠に矛盾することなきものである。まさに朱子學の大義名分論は、わが國に來つてはじめて永遠の具體性をつかみ得たと言ひうる。したがつて、朱子學は徒らに形式化し抽象化する弊におちいるどころか、永遠の具體性をつかみとつたために絶對の安定性をかちえて、心ゆくまで自己を深め、眞に生命力あるものとなつたのである。

しかし、水戸學は徳川氏の親藩たる水戸藩の藩學であつたから、その制約をうけて、尊皇は直に討幕にまで徹底しきれず、むしろ尊皇は敬慕の精神と結合し、その點ですこぶる現狀維持的な嫌ひをまぬがれなかつ

た。この尊皇敬慕の精神は水戸學の根本とする敬神崇儒の精神と表裏し、水戸學が朱子學に執する不徹底さが、幕府肯定の不徹底さとつながつてゐた。

この不徹底さを、すつぱりとたちきつたのが、山崎闇齋にはじまる闇齋學である。闇齋學においては、朱子學の強調する「不事二君」の思想に啓發され、わが國において一體君とはどなたであるか、君とは、一天萬乗の至尊をにおいてほかにだれがあらうと、尊皇の大義に洞徹して、幕府に臣事するのは二君に事へることであるとして、幕府を否定した。しかして、この徹底さが、闇齋の佛を斥けて儒に入り、儒をこえて神道（垂加神道）に歸一した事實と合致することは注目すべきである。もつとも、弟子中には淺見綱齋らのごとく神道に徹するは行きすぎであるとし、朱子學に踏みとどまつたものもあつたが、一たび到達した幕府否定の精神は脈々として傳へられた。すなはち、この點に關するかぎり、朱子學に執した水戸學よりも、朱子學をのりこえた闇齋學において、むしろ朱子學の骨髓が活きてはたらし、日本革新の原動力となつてゐる。

かくして、永遠の具體性をかちえた朱子學は、尊皇

論の一元流となり、尊皇論は明治維新の原動力となつて、現代日本興隆の推進力となつた。そして現に國民精神の血となり肉となつて、朱子學の骨髓とする大義名分がわが國生成發展の力となつてゐる。

六

後期李朝にあつては徹底的に形式的抽象的に墮した朱子學が、わが國にてはあくまで具體的生命的なるものとして展開してゐる。彼にあつて衰亡の因となつた朱子學が、我において興國の力となつた所以は、こゝにたやすくみいだされよう。したがつて、その優劣を比較すれば、李朝の朱子學がいかに理論體系において精緻であらうとも、わが國の朱子學にくらべては遙に劣つたものと斷じなくてはならない。

もつとも、現在舉世蕩々としてわが思想界を風靡してゐる西洋思想による學問の定義、すなはち理論體系をもつて學問とする謬想に従ふと、結論は全く逆にされるかも知れない。

しかし、畢竟學問とはわれ／＼國民の具體的生活を豊にし、國家國運を發展させるために、ものごとを知るといふこと以外の何ものでもない。理論體系は理論

體系そのものが抽象的に貴いのではなく、ものごとを知る、手段としてのみ尊重されるべきである。されば後期李朝の朱子學のやうに、抽象化され形式化され、理論體系が精緻になればなるほど眞實具體相をみうしなつて、國家の發展を阻害するやうな學問は、二足三文の價值もないものである。それに反して、わが國の闇齋學のごとく、たとへ朱子學の範疇を逸脱したとみえるものでも、眞に朱子學の骨髓を活かし、國家興隆の力となり得たものは、朱子學を深め發展せしめたものとして、高く價值づけらるべきである。

このやうに、同じ朱子學が李朝では價值なきものになりさがり、わが國ではぐーんと深められたが、その根本の原因はと言へば、結局學人がわりきつた安住點を勝ち得たか否かにかゝつてゐる。わが國では、この本當にしつくりした境地（これを國家の道とよぶ）を求道の誠をつらぬいて把みとつたために、「天壤無窮」の自らなる「國家の道」が顯現し、朱子學を絶對の安定性を得て深まつた。これに反し、李朝學人は求道の誠をつらぬき得ず、一切をわりきりつくす安住點を得ることができなかつた。かくて、この安住點をつかみ得

ないといふこと、それ即ち國家に「道」なく、國家の斷滅するのが自らなる國柄としてあらはれ、一時ある原理をかり來つてわりきつたつもりでゐても、必ず同じ原理によつて否定される悲劇となつたのである。したがつて、文化も安定性がなく、一時どんなに榮えることがあつても、やがて國家とともに蕭條として衰亡してゆくのである。

七

一國の文化はその生命主體たる國體をはなれて抽象的には存在し得ない。國民がわりきつた安住點をみいだし得ない國柄にあつては、文化がいかに慘な貌様を露呈するか、後期李朝の朱子學が明々白々としてものがたつてゐる。

* 本稿は鴛淵一・伊藤三千代・石井壽夫共著「皇國史としての大東亞史」(尙志教育論)(叢第一輯)の一註脚として草したものである。
〔昭和十六年十二月十九日脱稿〕